

# 宗祐池東第4号古墳

—「令和6年度 みよしの歴史を探る」発表資料—

# はじめに

株式会社島田組では、三次市発注の「市道十日市 194 号線宗祐池東第 2 号古墳発掘調査業務委託」を請け負い、令和 6 (2024) 年 9 月から発掘調査をすすめてきました。この事業は、三次工業団地と市道宗祐線・三次東 IC 方面を結ぶ市道十日市 194 号線建設工事に伴うもので、建設予定地の三次市南畑敷町地内所在の古墳 1 基を対象とした記録保存調査です。調査の結果、本古墳は直径 15m という中小規模の円墳ながら、赤彩の竪穴式石槨のほか複数の埋葬施設を有するという充実した内容を持つことが明らかとなりました。三次盆地では初めて古墳時代前期前半の定点的古墳として位置づけうる成果となりましたので、このたび「令和 6 年度 みよしの歴史を探る」講演会で速報として発表いたします。今回の調査が、三次市の歴史のさらなる一端を知る一助となりましたら幸いです。

なお、本古墳の名称に関しては、調査期間中の令和 6 年 12 月 7 日に開催した現地説明会や、一部報道・弊社ウェブサイトにおいて、暫定的に「宗祐池東古墳」と仮称して発表してきました。その後、調査と並行して宗祐池東古墳群の整理をおこない、今回から本古墳の名称を「宗祐池東第 4 号古墳」(以下、宗祐池東 4 号墳と略称)と改めて発表いたします。発掘調査は発表日時点も進行中であり、今後の整理作業によっては報告書刊行時に規模・見解等を変更する可能性があります。あらかじめご了承ください。

## 目次

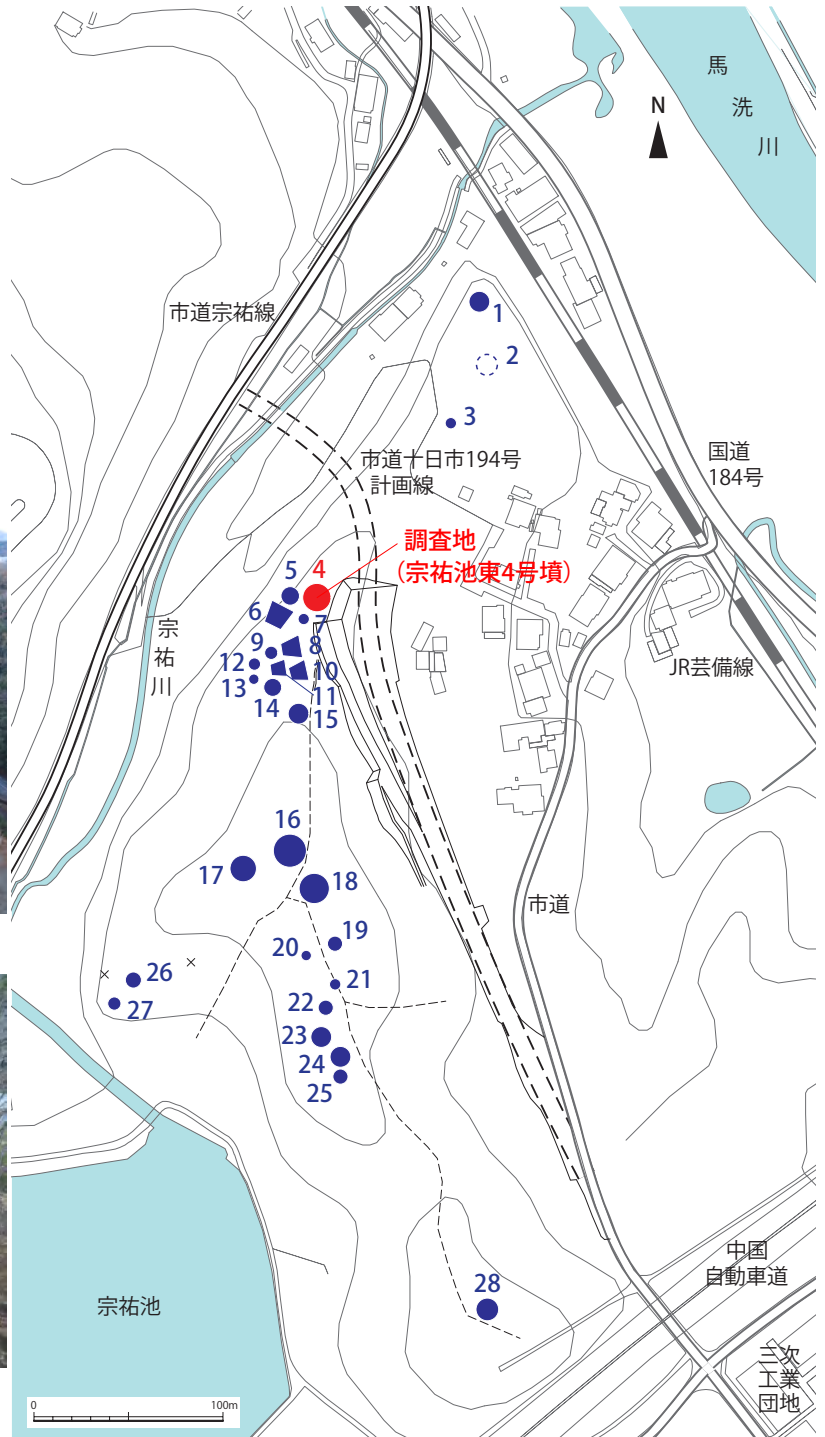
はじめに	・ ・ 1
目次	・ ・ 1
1. 立地	— 豊かな眺望 — ・ ・ 2
2. 墳丘	— 黄色のドーム — ・ ・ 3
3. 埋葬施設 1	— ひしめく棺 — ・ ・ 4
4. 埋葬施設 2	— 赤の空間 — ・ ・ 5
5. 埋葬施設 3	— 副葬品なし — ・ ・ 6
6. 出土品	— 最古級の倭鏡 — ・ ・ 7
おわりに	・ ・ 7



調査地上空から南方向を望む  
(中央に古墳群の所在する丘陵、右に宗祐川、奥に宗祐池)



調査地全景 (上空東から)



宗祐池東古墳群分布図

国土地理院基盤地図情報上に、調査地付近は地形測量、その他はGPS測量により作成



調査地上空から北西方向を望む（背景に馬洗川・八次地域の町並み）



三次盆地における調査地位置  
 (●は古墳、地理院地図傾斜量図上に作成)

調査対象である宗祐池東4号墳は、三次市南畑敷町（みなみはたじま）に所在する古墳です。広島県北部、「霧の海」が名物の三次盆地のほぼ中央部、江の川支流の馬洗川（ばせんがわ）南岸の低丘陵上に位置しています。一帯は、三次盆地のなかでも有数の遺跡密集地で、旧石器時代の下本谷遺跡、弥生時代前期の集落跡を含む高蜂遺跡、同中期の初源的四隅突出型墳丘墓を含む宗祐池西遺跡、同終末期の四隅突出型の矢谷墳丘墓（国史跡「矢谷古墳」）、古墳時代後期の集落跡を含む松ヶ迫遺跡群、古代の三次郡衙跡の下本谷遺跡（県史跡）などが知られています。古墳についても、約4,000基もの古墳が存在する三次市域のなかでも比較的密集度の高い地域で、宗祐池東古墳群・宗祐池西古墳群・緑岩古墳などの古墳が分布し、馬洗川対岸の四拾貫古墳群とともに、古代三次郡の「播次郷」（ハタスキ、後世の畠敷（ハタジキ）・八次（ヤツギ）地域）に重なるまとまりを形成しています。



宗祐池東4号墳の墳丘景観

本古墳が属する宗祐池東古墳群は、県北有数のため池である宗祐池（むねすけいけ、地元ではミノスケと通称）から北流する宗祐川の東岸、標高207m（国道184号からの比高差約43m）の低丘陵上に分布しています。丘陵上では、近年の踏査で、本古墳含む28基の古墳が確認されています。丘陵頂部にある直径14～18mの円墳3基を最大規模として、北側尾根線上に15基、南側尾根線上に8基、西側尾根線上に2基が並びます。今回が初めての本調査となるため、古墳群の詳細は明らかではありませんが、丘陵頂部の一帯は、三次盆地で典型的な5世紀後半～6世紀前半頃のいわゆる古式群集墳と考えられます。北側尾根の一帯はそれよりもやや古い時期で、逆に西側尾根の一帯は横穴式石室を埋葬施設とする新しい時期と推測されます。今回の調査対象である4号墳は、北側尾根の一帯の北端の傾斜面上（墳頂部標高193.8m）に位置しており、眼前に馬洗川への豊かな眺望が開ける好立地といえます。



岩脇1号墳の墳丘景観と眺望

三次盆地では、本古墳と近い時期と推定される大仙大平山21号墳（向江田町、非現存）や岩脇1号墳（粟屋町、県史跡「岩脇古墳」）でも同様の眺望が認められ、いずれも丘陵斜面に立地しています。ただし、首長級の規模の岩脇1号墳が三次盆地を広く一望するのに対して、本古墳では八次地域への眺望に限定的で、古墳の眺望範囲と被葬者の活動範囲の相関を示唆するようです。また、丘陵前の馬洗川沿いは、現在も国道184号・JR芸備線が通る交通上の要地であり、川の狭隘部を扼する宗祐池東・西古墳群と四拾貫古墳群の存在は、水上・陸上交通との関係も示唆します。



墳丘・周溝（表土掘削後、北西から。丘陵斜面の円形墳丘と周溝の黒色埋土）



調査前状況（南から）



表土掘削後状況（南から）



矢谷墳丘墓（丘陵頂部、四隅突出型方形墳丘）  
（『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年）



大仙大平山 21 号墳（丘陵斜面、方形墳丘）  
（『大仙大平山第 21・22 号古墳』2000 年）



岩脇 1 号墳（丘陵斜面、円形墳丘）

墳丘・周溝は、丘陵の傾斜面上に築造されています。斜面下方側に墳丘裾が広がるため、尾根線に沿って長軸を持つやや楕円形の平面形を呈し、周溝を含めた古墳全体としては、北東―南西の長軸で約 19m、北西―南東の短軸で約 17m を測ります。

墳丘は、やや楕円形で、直径約 15m を測ります。地山のローム層・黒ボク土層を削り出した上に、盛土で構築されています。外表に葺石・埴輪は認められない代わりに、ローム土を厚さ 10cm 程度のせており、「黄色のドーム」状の外観に化粧されています。墳頂部に盗掘を示唆する陥没坑は認められませんでした。墳頂部の表土から土師器高杯片が、墳丘上から銅鏡片が出土しました。

周溝は、墳丘の周囲に全周しており、墳丘と相似する楕円形の平面形です。幅・深さは一定ではなく、南西（斜面上方）側では、ローム層までの深い掘り込みですが、北東（斜面下方）側では、黒ボク土層までの浅い掘り込みです。周溝内では、主に墳丘北側で土師器片が出土しましたが、埴輪・須恵器は認められませんでした。

弥生時代の三次盆地では、宗祐池西遺跡（南畑敷町、非現存）・矢谷墳丘墓の四隅突出型墳丘墓や、矢谷 MS1・2 号墓の方形区画墓のような「方形（四角形）」の墓がみられます。古墳時代前期に入ると、大仙大平山 21 号墳などの伝統的な方墳とともに、岩脇 1 号墳・宗祐池東 4 号墳などの円墳や、若宮古墳（十日市南、県史跡）などの前方後円墳のような新たな「円形」「前方後円形」の墓が出現します。葺石・埴輪を完備する定型化古墳の導入には至らないものの、方形の伝統から一線を画す円形墳丘の姿は、畿内・瀬戸内地方から三次盆地への古墳文化の流入を示唆します。



墳丘内の埋葬施設群（西やや上から。手前に竪穴式石槨、奥に箱式石棺群）



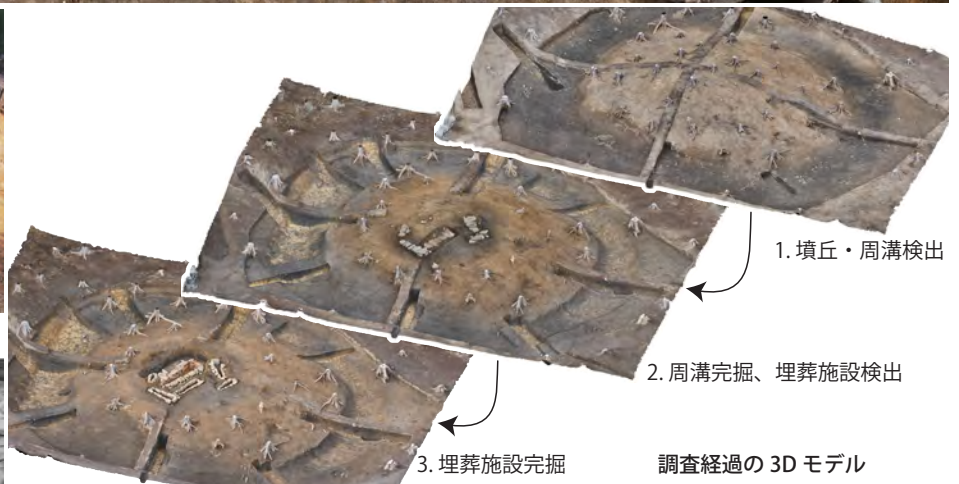
大仙大平山 21 号墳の多数埋葬  
（『大仙大平山第 21・22 号古墳』2000 年）



岩脇 1 号墳の多数埋葬  
（『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』2018 年）



宮の本 24 号墳の少数並列埋葬  
（『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』29、2013 年）



1. 墳丘・周溝検出

2. 周溝完掘、埋葬施設検出

3. 埋葬施設完掘

調査経過の 3D モデル

墳丘上層を掘削したところ、墳丘内の埋葬施設として、竪穴式石槨 1 基・箱式石棺 5 基の計 6 基が姿を現しました。赤彩された竪穴式石槨が中心埋葬（初葬）とみられ、その周囲に箱式石棺群が追葬された様相です。

定型化した古墳では、墳頂部での単葬や少数並列埋葬（例：宮の本 24 号墳（向江田町、風土記の丘移築））が一般的です。本古墳のような中心埋葬に多数の小型埋葬がともなうあり方は、むしろ前時代（弥生時代）に近い様相といえます。すなわち、同時代後期頃の花園遺跡 1 号墳丘墓（西酒屋町、国史跡）上では埋葬施設 200 基以上が構築されており、集団墓的・家族墓的様相を呈します。終末期の矢谷墳丘墓上では 11 基が構築され、首長層の一族墓的様相へと階層化の進展を示唆します。古墳時代に入り、本古墳と近い時期とみられる大仙大平山 21 号墳では礫槨状割竹形木棺 1・箱式石棺 6・石蓋土坑 2 の 9 基が、岩脇 1 号墳では竪穴式石槨 1・箱式石棺 4・石蓋土坑 1・礫床小型木棺 1 の 7 基が構築されており、本古墳同様に「古墳時代的」な礫槨・石槨施設の中心埋葬に「弥生時代的」な複数の小型埋葬がともなっています。これらの多数埋葬のあり方は、弥生時代以来の伝統を色濃く残す過渡的様相といえます。ヤマト王権を表象する古墳文化が、王権から一元的に三次盆地に流入したのではなく、在地側で取捨選択して導入されたと評価できそうです。

## 4. 埋葬施設 2

## 赤の空間



墓坑掘削後（天井石検出）



天井石



天井石取り外し作業



天井石開封直後の竪穴式石槨内（足位から頭位方向）



石槨内完掘後（赤彩床面検出）



裏込掘削後（壁体裏面検出）



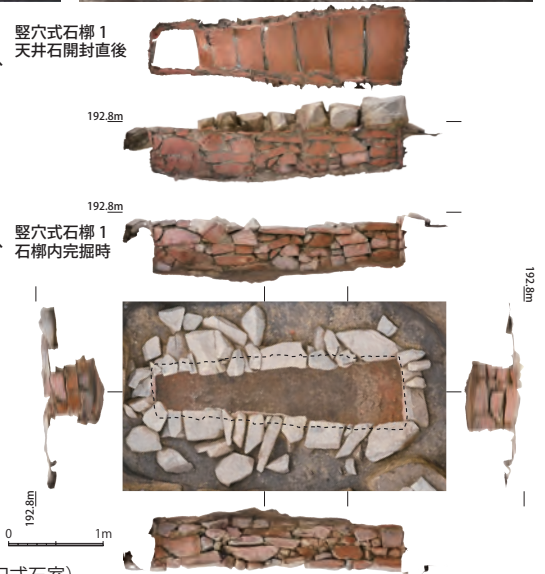
基底石列

埋葬施設群のうち最大規模の竪穴式石槨1は、墳丘中央部やや南西寄り（斜面上方側）に位置します。主軸は北西—南東方向です。石槨の墓坑は隅丸方形で、検出面で長さ4.2m・幅3.0mを測ります。墓坑検出面では天井石の直上で石列が確認され、弥生時代の墓標石を踏襲した墓標石列とみられます。

石槨の平面形は台形で、幅広側が頭位とみられ、内法は長さ2.67m・幅0.78m・高さ0.7～0.8mで、側壁は持ち送ります。天井石内面・壁面と床面両小口側は赤彩されており、辟邪思想の「赤の空間」を呈します。石材は割石ですが、長手積みや小口積みが混在し、頭側の基底石を縦に立てるなど、洗練された様相ではありません。工程としては、石材の隙間に白色粘土を詰めて床面両小口にも粘土を敷いたうえで、内面をベンガラで赤彩し、壁体の上に粘土を置き、赤彩した天井石8石を載せ、天井石外側の目地に粘土を詰めるという順序を復元できます。厳重な密封のため、石槨の内部にほとんど堆積はありませんでしたが、石槨内の遺物は人骨細片1点しかなく、副葬品は確認できませんでした。

竪穴式石槨は、同時期の王墓にも採用される施設ですが、小型で台形の平面形や用石にはあまり洗練さがうかがえず、やや個性的な石槨といえます。

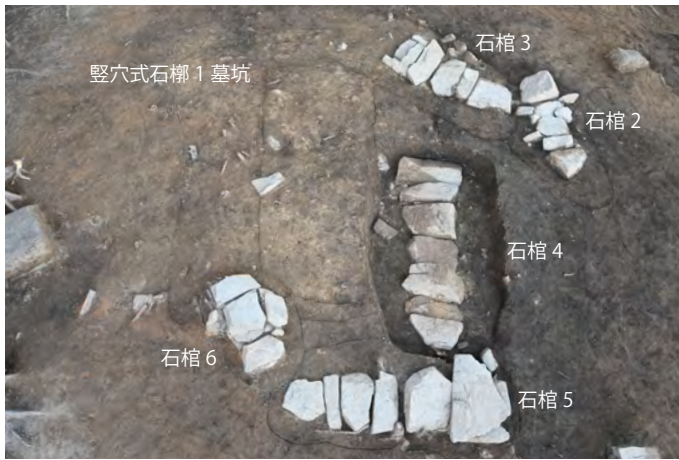
注) 石棺：石材でできた棺  
石室：石材の積み上げ/組み合わせでできた、棺を納める墓室状施設（例：横穴式石室、竪穴系横穴式石室）  
石槨：石材の積み上げ/組み合わせでできた、棺を納める箱状密封施設（例：竪穴式石槨、横穴式石槨）  
宗祐池東4号墳では、木棺痕跡は確認されていないものの棺を納める十分な空間があり、竪穴式石槨に該当。



竪穴式石槨 展開図 石槨床面の平面形を破線で表示

# 5. 埋葬施設 3

# 副葬品なし



縦穴式石槨 1 墓坑

石棺 3

石棺 2

石棺 4

石棺 6

石棺 5

埋葬施設群 蓋石検出 (上が北西)



縦穴式石槨 1

石棺 3

石棺 2

石棺 4

石棺 6

石棺 5

埋葬施設群 完掘後 (上が北西)



箱式石棺 2 (内法長 1.10m)



箱式石棺 3 (石室状石棺、内法長 1.65m)



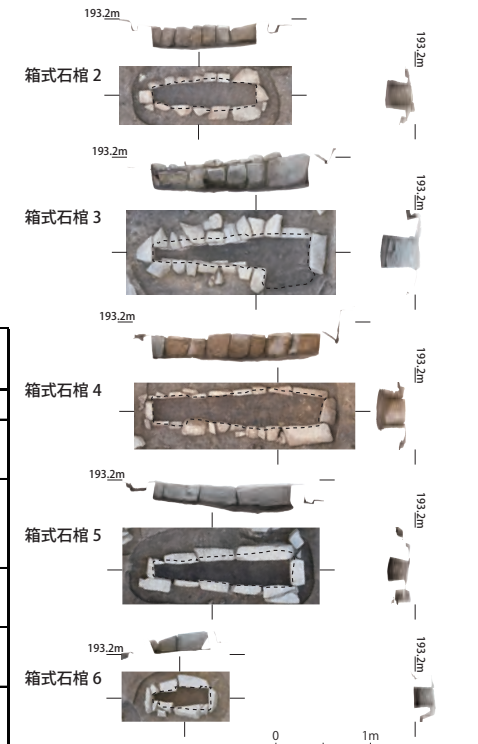
箱式石棺 4 (最大規模、内法長 1.79m)



箱式石棺 5 (内法長 1.48m)



箱式石棺 6 (最小規模、内法長 0.60m)



箱式石棺 展開図

石棺床面の平面形を破線で表示

埋葬施設 一覧表

	主軸	平面	内法		配石					備考
			長さ	最大幅	頭小口	左側石	右側石	足小口	蓋石	
縦穴式石槨1	N-51.1° -W	台形	2.67m	0.78m	4段	4~5段	4~5段	3~4段	8石	人骨片1
箱式石棺2	N-50.6° -W (石槨1平行)	台形	1.10m	0.34m	1石	5石	7石	1石	5石	
箱式石棺3	N-102.3° -W (石槨1斜交)	台形	1.65m	0.38m	上 不明 下 1石	上 残7石 下 残7石	上 残9石 下 8石	上 1石 下 1石	残5石	石室状石棺 頭部盗掘 土師器片1
箱式石棺4	N-49.9° -W (石槨1平行)	台形	1.79m	0.50m	1石	9石	8石	1石	7石	土師器片1
箱式石棺5	N-41.0° -W (石槨1直交)	台形	1.48m	0.39m	1石	5石	4石	1石	6石	
箱式石棺6	N-72.0° -W (石槨1斜交)	台形	0.60m	0.24m	1石	3石	3石	1石	3石	小児用石棺

※台形平面の幅広側を頭位とし、仰臥位とした場合で左右側石を定義。

縦穴式石槨 1 の周囲には、箱式石棺 5 基が構築されています。縦穴式石槨 1 と同様に棺身の平面形はいずれも台形で、幅広側が頭位とみられますが、人の身体がようやく入るだけの空間しかありません。5 基のうち石棺 3 では頭部が盗掘に遭っていました。小型の石棺が多く、特に石棺 6 は内法長 0.60m と極めて小型です。石棺の配石は、石材を縦向きに 1 段立てるものと、横向きに 1 段立てるものに大別できますが、石棺 3 だけは縦石 1 段目の上に小口積みの 2 段目を構築する、特異な 2 段積みの石室状形態です。いずれの石棺内にも人骨は残っておらず、石棺 3・4 の土師器細片 1 点ずつの混入以外に副葬品も確認されていません。石棺の主軸として、石棺 4・5 は石槨 1 と平行方向、石棺 5 は直交方向、石棺 3・6 は斜交方向です。主軸・高さ・切り合い関係から、石槨 1→石棺 4→石棺 2・石棺 5→石棺 3→石棺 6 の構築順とみられますが、遺物がないためその時間幅は明らかではありません。

以上のように、縦穴式石槨・箱式石棺とも副葬品は発見されませんでした。三次盆地では、矢谷墳丘墓の副葬品はガラス小玉・碧玉製管玉・鉄刀子・鉄鉈のみ、大仙大平山 21 号墳はガラス小玉・鉄鏃のみ、岩脇 1 号墳は遺物なしとされます。畿内では古墳時代前期に銅鏡・玉類・石製腕飾類などの呪術具を副葬する傾向にありますが、三次盆地では器物をあまり副葬しないという独自の埋葬をおこなうようです。この点でも古墳文化が在地側の取捨選択のうえで導入されたことを示唆します。

## 6. 出土品

## 最古級の倭鏡

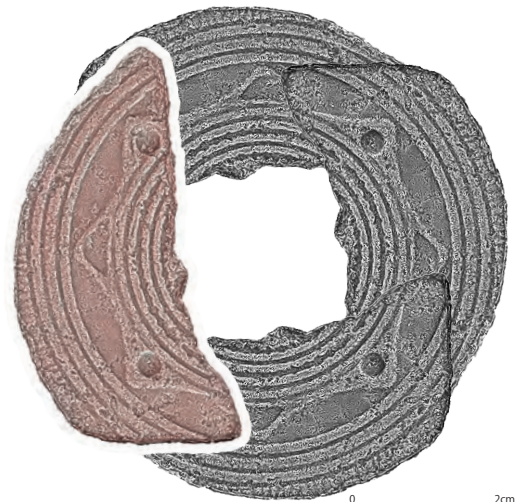
出土遺物は極めて少なく、人骨・銅鏡・土師器に限られます。埋葬施設内では、竪穴式石槨1の内部から人骨細片1点が出土したほか、箱式石棺群では石棺3・4から土師器細片各1点が出土しただけで、副葬品は認められませんでした。墳丘では、表土付近において銅鏡片・土師器高杯片が出土しています。また周溝内では、墳丘の北側(斜面下方側)において、多数の土師器片が出土しています。そのほとんどは細片で、器形のわかるものは限られますが、二重口縁の壺または甕片があります。なお、須恵器・埴輪は出土していません。

銅鏡は、墳丘上面の表土直下から出土しました。残存長は5.2cm分です。縁部および鈕を欠失しており、残存部分の復元面径は6.7cmです。破片の外端を円弧状に整えた、破鏡と考えられます。重圏文鏡・八弧内行花文鏡の両方の特徴を持つ国産の小型倭鏡(仿製鏡)です。前期倭鏡でも最古級の型式です。

土師器のうち高杯は、竪穴式石槨1直上の墳頂表土中から出土しました。椀形高杯の脚部とみられ、破片端部に穿孔があり、外表全面が赤彩されています。古墳時代前期前半の遺物とみられ、広島県内では珍しい出土例です。墳丘上で供献使用された可能性があります。

土師器のうち二重口縁片は、墳丘北西の周溝内から出土しました。壺・甕形土器の口縁部で、一部に赤彩が残ります。墳丘上で供献使用されたものが転落したものの可能性があります。ただし高杯よりも新しい時期の器形であり、時間差があるようです。

これまで、三次盆地では大仙大平山21号墳・岩脇1号墳が古墳時代前期前半に遡る可能性があると考えられながら、時期を示す遺物を伴わないため、長らく不明とされてきました。本古墳の調査で、わずかながら初めてこの時期の遺物が出土したことは、三次盆地の古墳時代史の空白を埋める画期的な成果です。



墳丘上出土 鏡片 (左の破片。同一片を回転合成)  
※3D図のため、実物と色が異なります



墳頂部出土 土師器片 (高杯)      周溝出土 土師器片 (二重口縁壺・甕)

## おわりに

今回の宗祐池東4号墳の調査では、古墳が丘陵斜面に立地して豊かな眺望を持ち、直径15mの黄色のドーム状の円形墳丘に周溝が巡らされ、墳丘内には竪穴式石槨1基・箱式石棺5基のひしめく棺が構築され、そのうち石槨が赤彩による赤の空間を呈し、埋葬施設内には副葬品なしながら、墳丘から最古級の倭鏡・土師器が出土し、古墳時代前期前半(西暦4世紀前後)頃の築造と推定されることが明らかとなりました。三次盆地には多数の古墳がありながら、これまで前期前半の様相は不明とされ、文字通り「霧」に包まれていました。本古墳は当該時期で初めての定点的古墳として位置づけることができ、古墳文化が三次盆地へ取捨選択のうえで導入されたという様相から、弥生時代から古墳時代への移り変わりを考えるうえでも重要な成果となりました。

三次市域には約4,000基もの古墳が存在するといわれますが、その多くは古墳時代中期以降、5世紀後半～6世紀前半頃のいわゆる古式群集墳とされます。本古墳から古式群集墳成立までの間、前期後半の4世紀後半頃の古墳としては、測量調査で若宮古墳などの前方後円墳が、発掘調査で浄楽寺37号墳(高杉町、国史跡)・四拾貫太郎丸2号墳(四拾貫町)などの円墳が挙げられていますが、調査例に乏しく、その実像は未だ「霧」に包まれています。中期初頭の4世紀末～5世紀初頭頃には、宮の本24号墳・浄楽寺12号墳(高杉町、国史跡)が定点的古墳として存在しますが、その外観は葺石・埴輪が完備した定型化古墳そのものです。三次盆地に流入した古墳文化が、どのように発達して、膨大な古墳の築造に至るのか。この宗祐池東4号墳の調査を礎として、いつの日か三次盆地の古墳時代史の「霧の海」が晴れることを期待します。

今回の調査では、三次市をはじめとする関係機関・関係者の方々にご指導・ご協力を頂きました。この場をもって感謝申し上げます。

### 参考文献

- 『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇、広島県双三郡三次市史料総覧刊行会、1974年。
- 『大仙大平山第21・22号古墳』三次市文化財調査報告書第1集、三次市教育委員会、2000年。
- 『三次市史』I(自然環境・原始古代通史・中世近世通史)、三次市、2004年。
- 『三次市史』II(遺跡・山城、古代・中世文献、木簡・棟札等、近世文献資料)、三次市、2004年。
- 『広島県遺跡地図』XI、広島県教育委員会、2006年。
- 『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』広島県三次市文化財調査報告書第11集、三次市教育委員会・特定非営利活動法人広島文化財センター、2018年。
- 加藤光臣「三次盆地の方墳―前半期古墳理解への新たな視点―」『芸備』第50集、2018年。
- 加藤光臣「周辺遺跡からみた寺町廃寺創建の歴史的背景」『史跡寺町廃寺跡』広島県三次市文化財調査報告書第15集、三次市教育委員会、2022年。



宮の本24号墳  
(『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』29、2013年)



調査地にかかる虹

## 宗祐池東第4号古墳

—「令和6年度 みよしの歴史を探る」発表資料—

令和7(2025)年2月23日

株式会社島田組

〒581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2  
<https://shimadagumi.co.jp/>

